

第8章

アフリカ史・世界史・比較史

はじめに

本章に与えられた課題は、「世界のなかのアフリカ」という共通テーマを歴史学の立場から受け止め、アフリカと世界、あるいはアフリカと世界の他の地域との「比較」の視座を示すことである。アフリカの危機が叫ばれて長く、その将来について「アフリカン・ペシミズム」が浸透しているかにみえる今日、アフリカをその「特殊性」の罠から救い出し、国際社会を構成する当たり前の一員としての地位を回復させるために、歴史学という学問がどのような寄与をできるかを検討してみることは、アフリカ史研究の到達点を確かめることでもあり、歴史学の今日的意義を試す営みでもある。

以下では、近代の歴史学のなかでアフリカ史が占めてきた位置を史学史的に検討し、アフリカ史研究の視点と方法の変遷を概観するとともに、アフリカ史を「世界史」のなかに位置づけて構想するための手がかりとして、「比較史」の方法がもつ可能性について考えてみる。

いうまでもなく、アフリカ史研究の蓄積は、歴史学の他の分野に比べれば浅いとはいえ、すでに膨大なものがあり、それを網羅的に検討することは筆者の力量を超えている。ここでは、あくまでも大まかな傾向の把握に努め、筆者自身の目にとまったいくつかの作品に言及するにとどめざるをえない。

第1節 世界史認識におけるアフリカ史

1. 普遍史と発展段階論

近代ヨーロッパの世界史認識において、アフリカが「歴史なき」大陸とされてきたことはよく知られている。ヘーゲルは、『歴史哲学講義』（1837年）において、「本来のアフリカ（サハラ以南アフリカ引用者）は、歴史的にさかのぼれるかぎりでは、ほかの世界との交渉をもたない閉鎖地帯です。内部にひきこもった黄金の地、子どもの国であって、歴史にめざめる以前の暗黒の夜におおわれています」（ヘーゲル [1994: 上巻157]）と述べている。魔術や奴隷制などをアフリカ社会を特徴づける事象としてとりあげたのち、「以上にのべたさまざまな特徴からうかびあがるのは、黒人の野放図な性格です。こうした状態にある黒人は、発展することもなければ文化を形成することもなく、過去のどの時点をとってもいまとかわらない」と結論づけている。そして、「これをもってアフリカにわかれを告げ、以後はもう話題にすることはやめにします。アフリカは世界史に属する地域ではなく、運動も発展も見られないからです。……本来の意味でのアフリカは、歴史を欠いた閉鎖的な世界であって、いまだまったく自然のままの精神にとらわれ、世界史の敷居のところにおいておくほかない地域です」「アフリカを歴史の外におしやったところで、いまや世界史の現実の舞台がはじめて見えてきます」（ヘーゲル [1994: 上巻159-169]）とアフリカに関する言及を急いで切り上げている。アフリカに歴史がないだけでなく、アフリカを除外しなくては世界史そのものがみえてこない、というのである。ヘーゲルの「世界史」とは、ヨーロッパ史こそが世界の歴史を体現する、という意味での「普遍史」であった。

ヘーゲルは、世界史を自由の意識の発展に向かう精神の運動ととらえ、そのような立場からアフリカに「歴史がない」とし、あえてアフリカを普遍史としての世界史から除外した。これに対し、近代歴史学の祖といわれるラン

ケは、人類の発展の「普遍性」から出発するヘーゲルを批判し、「個別性」という点に歴史の本質をみようとした。「神は歴史上の全人類をその全体において見とおしていて、何処においても平等な価値をみとめているものである」(ランケ [1941: 38])。しかし、そのことは、ランケが進歩の観念を否定していることを意味するわけではなかった。ランケによれば、「人類の大半がいまなお原始状態にあり、出発点そのものにとどまっている」、そして、「世界史的な運動に参加するものは、人類全体の中においてわずかに一つの(＝ラテン・ゲルマンの一引用者)住民体験があるにすぎない」(ランケ [1941: 34-35]) のである。そこで進歩の運動に参加しないものとして例示されているのは「アジア」であり、アフリカは言及すらされていない。ヘーゲルが、「アフリカ」を世界史から除外しながらも、三つの地域(サハラ砂漠以南、サハラ砂漠以北の海岸地帯、ナイル川流域)に分け、それぞれの特徴を意識している(ヘーゲル [1994: 上巻157-158]) のとは異なり、「個別」を重視するランケの場合には、アフリカについていかなる知識をもっていたのかを知る由もない。アフリカは、ヨーロッパの対立物としての抽象的な「アジア」のなかに解消されてしまっているのである。

普遍史の立場に立つヘーゲルと、「個別」を歴史の基礎とするランケとは、世界史をとらえるうえで逆の方向から出発していた。しかし、両者ともヨーロッパのみに「進歩」を承認する点において、完全に一致している。いずれも、現実のアジア・アフリカとの関係を反映した、典型的なヨーロッパ近代の思考であった。

その後、ランケの実証主義は、歴史学の本道へと発展していくが、ロマン主義の風潮のなかで生まれたその本質からして、ヨーロッパの実証主義がアフリカに関心を寄せる理由はなかった。一方、ヘーゲル流の普遍史は、マルクスによる唯物史観へと引き継がれていった。人類社会の歴史の法則的把握は、元来、世界のあらゆる地域に発展の可能性を見いだそうとするものであった。それにしたがえば、アフリカにも「歴史」が見いだされるはずだった。しかし、多様な世界の歴史に単一の法則の存在を前提する、そのこと自身の

ゆえに、マルクスの社会構成体論は、さまざまな地域の発展の度合いを比較
する方法に容易に転じた。それは、結果として、アフリカの「後れ」を肯定
するものとなった。

第二次世界大戦後のアメリカに生まれた「近代化論」は、資本主義的近代
を礼賛する点でマルクスとはまったく逆の含意をもつものであったが、諸社
会の歴史を単一の尺度によって比較する点において、マルクスの発展段階論
と軌を一にすることになった。ここでも、アフリカは最も「後れた」ところ
に位置づけられるしかなかった。

近代ヨーロッパの世界史認識は、一方における実証主義と他方における法
則史観、発展段階論という相異なるベクトルを含みながらも、20世紀半ば過
ぎまで、日本を含む世界の歴史学を強固に支配し続けた。そのなかで作られ
たアフリカ史の見方は、アフリカ諸国の独立を経てもなおしばらく変化しな
かったように見受けられる。現代イギリスの代表的な歴史家トレヴァー＝ロ
ーパーの1963年の次の発言は、アフリカ史研究者の間ではしばしば引き合い
に出される。「たぶん、将来は、教えるべきいくばくかのアフリカ史が現れ
るだろう。しかし、今のところそれは全くあるいはほとんどない。アフリカ
におけるヨーロッパ人の歴史があるのみである。その他はほとんど暗黒であ
る。……そして、暗黒は歴史学の対象ではない。どうか私のことを誤解しな
いでほしい。私は暗黒の国々、暗黒の世紀にも人間が存在し、彼らが政治的
生活と文化をもっていたことを否定するものではない。それらは社会学者や
人類学者にとっては興味深いものだろう。しかし、私は、歴史というものは
運動、それも合目的な運動の一つの形だと考えている。それは、姿格好と
衣装、戦闘と征服、王朝と篡奪、社会の形成と分裂などの走馬灯のように移
り変わる光景のことではない」。さらには、「地球上の牧歌的かもしれないが
重要性のない場所の野蛮な部族たちの無駄な繰り返しを面白がっている暇な
どないのだ」(Trevor-Roper [1966: 9,11])⁽¹⁾と。

ここにもまた、歴史を合目的な運動とし、アフリカ社会にはそのような
運動が欠如しているがゆえに「歴史」そのものが欠如しているとするヘーゲ

ル以来の考え方がほぼそのままの形で繰り返されている。この時期には、のちにみるとおり、独立を達成したアフリカの国々のなかから歴史家が現れ、アフリカの歴史をみずから描くようになっていたが、そうした成果は、ヨーロッパの歴史家たちには未だ届いていなかった。トレヴァー＝ローパーの極端な発言はアフリカの研究者たちから集中砲火を浴びたが、同様の考え方はヨーロッパのほとんどの歴史家たちに多かれ少なかれ共有されていたといわなくてはならない。

2. 歴史学の転回

トレヴァー＝ローパーに象徴されるようなアフリカ史の見方に対する批判は、二つの方向から生まれてくる。一つは、歴史学の方法についてのヨーロッパの歴史学自身のなかからの反省であり、もう一つは、アフリカ史研究の進展である。ここではまず前者についてみていく。

「アフリカには歴史がない」との見方が一般的だったとはいえ、ヘーゲルからマルクスに連なる法則史観というべきものがヨーロッパの歴史学のなかでもった影響力は、20世紀半ばまで、決して大きくはなかった。歴史学の本道は、あくまでも個別実証主義にあった。客観的な実在を素朴に信ずるランケ流の実証主義への批判が生まれたのは、ようやく第二次世界大戦後になってからである。圧倒的に政治史中心であった実証史学を批判するうえで、マルクス主義の発展段階論＝社会経済史がはじめて歴史の理論として注目されるようになった⁽²⁾。折りしもその時期にアフリカ諸国が相次いで独立し、少なからぬ国が社会主義の政策をとったことで、理論的志向を強くもつマルクス主義史家たちが、資本主義段階を経ない社会主義化の可能性という関心から、アフリカの歴史を研究した。それによって、アフリカがはじめて「世界史」のなかで然るべき位置を占めるものとして認知されたといえる。実際、ソ連邦や東ドイツを中心とする社会主義諸国でのアフリカ史研究は、多くの成果を生み出した (Curtin [1981: 68])⁽³⁾。しかし、そこでの関心はあくまで

も理論にあり、未だアフリカの歴史そのものが復権したといえる状況ではなかった。

一方、すでにその時期に、政治史を中心とする歴史学への批判は、「社会史」という形でも提起された。歴史学は人間社会を時間軸にそって理解するというその本質からして、社会の「進歩」とはいわないまでも「変化」に関心をおいてきた。それに異を唱え、「通時的歴史から共時的歴史へ」と謳ったのが、「社会史」の潮流である⁽⁴⁾。

伝統史学が王朝の盛衰や革命などの政治的事件を辿る形で歴史を描いてきたのに対し、「社会史」派は、それを歴史のいわば表層とみ、逆に深層にあって長い期間変化しない部分、「ロング・デュレ長期的持続」に着目した。つまり、さまざまな時代を通じて一貫している社会の構造や、人間のものの考え方、行動様式、マンタリテ心性などである。それはまた、歴史の表舞台に現れる王侯貴族や政治家などではなく、声なき民、つまり一般の民衆と、女性、賤民、移動民など社会のなかで差別され排除されてきた社会集団に光を当てることでもあった。そのような視点の転換は、世界史にあてはめれば、ヨーロッパ中心の歴史観を否定し、アフリカなど「周辺」地域から歴史をみることに通ずる。ここへきてようやく、アフリカの歴史が世界史のなかで固有の価値をもつものとして認知される可能性が開かれたといえよう。

「周辺」的なものへの関心の移動は、歴史分析において依拠すべき史料の性格の変化と並行していた。伝統史学が、その関心からして、権力者の残す公文書などの史料を重視したのとは異なり、「社会史」の対象は、みずから記録を書き残さず、また記録を残した権力者の関心にも入らなかった人々である。そうした人々の生きた歴史を描くためには、公文書以外の日記類など私文書史料ばかりでなく、そもそも文字史料として残らなかった事柄に関する史料が必要となる。代表的にはオーラルな史料や図像史料などである。人間の言葉遣いや立ち居振る舞いまでもが歴史の史料とされることになった。文字以外の形の史料が文字史料と対等の価値をもつことが承認され、文字史料の伝えない情報も「歴史」とされることにより、文字そのものが基本的に

存在しなかったアフリカの歴史も、世界史のなかで特殊な存在ではなくなった。

こうして、「社会史」は、「共時的」な見方をすることで歴史学を人類学に接近させ、他方、史料面でも非文字史料の価値を文字史料と等価に引き上げることで、歴史学自身のなかからアフリカ史の復権に道を切り開くものであった⁽⁵⁾。

第2節 アフリカ史研究の歩み

1. アフリカニストの出現

ヨーロッパあるいはアラブ＝イスラム世界といった外界からの旅行者の観察を別とすれば、アフリカ社会の歴史に対する関心は、ヨーロッパが植民地支配を行うための必要から生じたものだった。19世紀後半の「帝国の時代」には、イギリスのシーリーに代表されるような「帝国史家」といわれる一連の歴史家たちが現れ、アフリカを含む「帝国」の歴史の叙述を行った⁽⁶⁾。しかしそれは、あくまでも、植民地におけるヨーロッパ人の歴史、つまり植民地史であった。「歴史がない」とされたアフリカ社会そのものの分析は、歴史学ではなく、あくまでも考古学や人類学の領域とされた。アフリカ各地の住民のなかに入っのてのキリスト教宣教師の活動ともあいまって、19世紀末から20世紀前半に、考古学者や人類学者また言語学者によって個別の民族集団についての記述が多く書かれ⁽⁷⁾、その後のアフリカ史研究の土台となったのは事実である。しかし、それは、この時代の「歴史学」の成果ではなかった。

第二次世界大戦後になると、「帝国史」「植民地史」の延長線上でとはいえ、イギリスをはじめとするヨーロッパの大学にアフリカ史の講座が設けられる。また、同じ時期に、未だ植民地であったアフリカ諸国にも大学が作られ始めた。それは、アフリカ史が歴史学の一分野としての地位を得る第一歩だった。

当初、アフリカの新しい大学にはヨーロッパのアフリカ史研究者が赴いたが、次第にアフリカ人の歴史家が現れ、植民地独立前夜には、アフリカ人自身がアフリカの大学で教鞭をとるようになる⁽⁸⁾。アフリカ人の歴史家の出現とともに、「アフリカ史」は固有の価値をもつものとして、「植民地史」とは明確に異なる問題意識と方法によって研究されるようになっていく。そのような営みに携わる人々は、ヨーロッパ人であるかアフリカ人であるかを問わず、自らを「アフリカニスト」と呼んだ。アフリカニストの出現は、何よりも、独立前後のアフリカ人の政治的力の増大を反映していた。

アフリカニストの歴史研究の目標は、オースティンによれば、次の三点にまとめられる。第一に植民地主義的歴史記述に対抗すること、第二にアフリカ固有の社会組織に注目し現地の史料に依拠した研究を行うこと、そして第三に西洋文化を換骨奪胎し、アフリカの近代的な国民を作ること、である(Austen [1993: 204])。

アフリカニストの歴史研究は、アフリカ社会には進歩がない、したがって歴史がない、とする植民地主義の、ひいてはヨーロッパ近代の歴史観とたたかうために、まず、アフリカ社会の過去のなかに「進歩」や「発展」の契機を見つけ、それを実証的に示そうとした。それを可能にするための方法が、文字以外の形の史料＝オーラル・トラディションをアフリカ史研究の中心的な史料とすることだった。なぜならば、ヨーロッパ人がアフリカに「歴史がない」という場合の主要な根拠が、「進歩」を裏づける記録史料が存在しないという点にあったからである。それまでの人類学の研究においてもオーラル・トラディションは使われていたが、アフリカニストの歴史研究において、それは人類学者によって理想化されたようなアフリカの「伝統社会」の構造を分析するためではなく、歴史的動態を分析するための史料とされた。ファンシーナの『歴史としてのオーラル・トラディション』(Vansina [1965])は、そのような立場を宣言するものであった。

アフリカ人自身が歴史家となることで、オーラル・ヒストリーの収集の幅が格段に広がると同時に、その利用もアフリカ人の社会の変遷を明らかにす

るという明確な目的意識をもって行われることになる。この時期、植民地体制下のアフリカ人の体験や植民地化以前のアフリカ社会の変容に関して、もっぱらオーラルな史料にもとづく研究が次々と著わされた⁽⁹⁾。

独立後の諸国で展開したアフリカニストの歴史研究を内容面で特徴づけたのは、そのナショナリスティックな性格である。たとえば、植民地支配下の歴史のなかでは、組織された抵抗の様相が好んでとりあげられた。とくに、政治的指導者の役割や、指導者を生み出した背景としてのミッシヨナリーの活動とアフリカ人との関わりが、のちの独立運動に直接結びつくものとして重視された。また、植民地化以前の歴史では、「王国」や「帝国」の存在が、アフリカにも「国家」があったことの証として、また独立国家の遠い前史として強調された。植民地化以前の交易の問題なども、それらの国家と結びつけて論じられた。「王国」や「帝国」が一般のアフリカ人に対してもった抑圧的な側面が顧みられる余地はなかった。

独立を達成したばかりの国々で、「国家」と「国民」の起源を明らかにすることに歴史研究の主眼がおかれたのはいわば当然のことだった。とくに、制度化されたアカデミズムや教育体制のなかで地位を得た限られた者のみが研究に携わり、在野の研究がありえないという独立直後のアフリカ諸国の現実のもとでは、歴史学は、多かれ少なかれ国家を正統化し擁護するための役割を担わざるをえなかった。こうした状況を今日の目からみて、狭隘なナショナリズムとか、歴史学の政治への奉仕、と難じることは容易だが、奪われてきた「歴史」を回復しようとする初期のアフリカニストたちの試みをつうじて、歴史がどれほど書き換えられたかを過小評価することはできない。たとえば、植民地時代の人類的な「歴史」研究が部族集団を軸にアフリカ社会をみようとしたのに対し、同じオーラル・トラディションを使いながら、この時代のアフリカニスト史家たちは、部族ではない人間集団の存在、広域的な集団間の関係などを描こうとした。そのような研究によって、アフリカ史は初めて、「静止的な部族集団の社会」という植民地時代に押しつけられた像から脱却し、世界史のなかに占める位置を自己主張できるようになった

のである。しかし、この点が、その後の研究の発展のなかで集中的に批判を浴びることになったのも事実である。

2. アフリカニストへの批判

1970年代になり、独立直後の熱気がおさまると、アフリカ史研究にも新しい動きがでてくる。それは、主として経済史家たちによるものだった。

国民形成の課題を強く意識したアフリカニストたちの歴史研究が国家と結びつくものだけを進歩とみなし、結果として社会のなかの指導的部分にばかり注目した政治史偏重の傾向をもったことを批判した経済史家たちは、アフリカ人の主体性を、政治よりは経済の場に見いだそうとした。たとえば、西アフリカ経済史のホプキンスは、アフリカ人のイニシアティヴを政治的リーダーではなく農民のうちにみ、彼らの行動を普遍的な市場合理性にもとづくものとして描いた (Hopkins [1973])。その立場からは、アフリカニストたちが重視した「国家」は、むしろ発展を阻害するものとなる。そうした主張は、アフリカの歴史が世界の他の地域と同じ原理で動いていることを証明し、アフリカを世界史の有機的部分としてとらえようとするものではあったが、そこで前提された普遍的原理とは、先進資本主義社会＝欧米による普遍性にほかならなかった。その意味で、これらの議論は、アフリカニストが近代国民国家という西洋的価値をなぞらえていると批判しながら、結局のところ、自らも同じ西洋の普遍主義の隘路に陥るものだった。この市場経済論は、歴史学的研究の手法として発展させられることはなく、むしろ、IMFなどを中心に行われる「援助」を通じてのアフリカに対する先進資本主義諸国のコントロールを支える論理となっていった。

これに対し、いっそう原理的にアフリカニストを批判したのは(ネオ・)マルクス主義者やそれに近い立場の研究者たちである。アミンらの従属論からウォーラーステインの世界システム論にいたる一連の議論では、アフリカニストの歴史学は、アフリカ内部に「発展」をみつけようとするあまり、先

進資本主義諸国とアフリカとの現実の格差を容認し、アフリカに対する世界規模の搾取の構造をみようとししない点でネオ・コロニアリズムに通ずると批判された（フランク [1979], アミン [1981] [1979], ウォーラーステイン [1981a] [1981b]）。

一方、メイヤスーなどフランスの構造主義マルクス主義者は、アフリカニストが近代的政治エリートを中心に歴史をみていることを批判し、資本主義以前の生産様式における階級形成と国家との関係に注目した（メイヤスー [1977]）。また、コクリ＝ヴィドロヴィチは、アフリカニストの歴史主義を克服し、アフリカを世界史の法則に組み入れるために、自給的農村と長距離交易との共存といった点から資本主義以前のアフリカの生産様式の特徴をとらえ、「アフリカの生産様式」の概念を提唱した（Coquery-Vidrovich [1985]）。

これらの議論は、アフリカニストの歴史家たちが、独立後の現実のなかで近代化という素朴な情熱に動かされていることからくる弱点を鋭く衝くものではあった。しかし、あくまでも歴史学の外部からの理論的批判という性格が強く、実証的な歴史研究に結実することは少なかった⁽¹⁰⁾。

世界経済論的な観点が具体的なアフリカ史研究に活かされ多くの成果を生んだ分野は、奴隷貿易史と南アフリカ史であろう。前者は、当然のことながら、アフリカの各国史の枠組みではなく、世界規模での搾取と蓄積、という観点からこそ説明されるべき現象であった。奴隷貿易に関して1970年代から1980年代にかけて発表された一連の研究は、奴隷貿易を世界システムのなかに位置づけるために、それまでのように、奴隷貿易の主体であるヨーロッパ社会や奴隷を受け容れた南北アメリカにとっての奴隷貿易・奴隷制の意味を探るばかりでなく、奴隷を送り出した側の事情にも光をあてるようになった。その結果、アフリカのさまざまな地域に即して、当該社会が奴隷を生み出したメカニズム、ヨーロッパからの奴隷商人とアフリカ人仲介者との関係、人口論・ジェンダー論からみた奴隷搬出の影響などについての実証的な分析が行われた。また、「奴隷制廃止」(abolitionism)についても同様に、ヨーロ

ツパの産業革命や啓蒙思想との関連でそれを論じることの多かった従来の研究に対して、アフリカ各地における「廃止」の実態や、奴隷貿易に代わるものとして出現した「合法貿易」の意味について、その後の植民地支配との関わりを含めて明らかにするような研究が進められた⁽¹¹⁾。

一方、南アフリカ史については、この国で「アパルトヘイト」という形の植民地状況が相変わらず続いている事実を説明するうえで、一国史的な例外現象としてではなく、それを世界経済上の位置や役割という観点から分析することが説得力をもったのである⁽¹²⁾。

3. ポストコロニアリズムとアフリカ史

アフリカの地に足場を置くことで植民地史を克服し始めたアフリカニストの歴史学も、その後のアフリカ諸国の経済的停滞の影響を被らずにはいなかった。財政的な貧しさのために、アフリカの高等教育機関は、研究者を育成し活発な研究を支えることができず、多くのアフリカ人の研究者たちが欧米の大学に職を得ることを目指すようになったからである。ある論者の表現を借りれば、「若いアフリカ人の研究者たちは、自分の論文が*Journal of African History*や*Cahiers d'études africaines*に載ることよりも、*American Historical Review*や*Annales ESC*に載ることの方を喜ぶようになった」(Jewsiewicki [1993: 219]) のである。こうして、アフリカ史研究の主要な舞台は、アフリカを離れ、とくに1980年代からは圧倒的にアメリカ合衆国に移った。それは、アフリカ史が欧米の諸国の歴史学においても不可欠の一分野として認められるようになったことの証ではあったが、同時に、アフリカ史研究の主体性が改めて試されることをも意味した。

アフリカ諸国の経済的停滞と民族的分裂の現実、アフリカニストたちの関心を「国民」を形成する下位の集団である民族＝エスニック集団⁽¹³⁾へと向かわせていた。1960年代以来の研究の蓄積により、アフリカを単純に停滞社会とみる見方はもはや通用しなくなっていたし、研究の緻密さも格段に増

していたとはいえ、そのことは、植民地時代の「部族集団の歴史」としてのアフリカ史像を復活させる危険と紙一重だった。もし欧米の歴史学が「国民」単位の歴史把握にもとづく旧態の方法を維持し、アフリカ諸国も西欧的近代化以外の未来図をもたずにいたならば、その危険は現実のものとなつたろう。しかし、実際には、欧米の歴史研究においては、第1節でみたように、1970年代から1980年代にかけて、「社会史」を中心とした大きな変化が進行していた。

欧米の歴史学の新しい動向は、アフリカ史研究にも少なからぬ影響を与えた。指導者より民衆に焦点をあてようとする「社会史」の方法は、アフリカニストの行き詰まりを乗り越える一つの方向性を示すものだった。「国家」か「民族＝エスニック集団」か、という問題設定にこだわるのではなく、それぞれの枠を固定的にとらえることをやめ、内部の流動性や集団相互の関係に着目することで、アフリカ社会の歴史のダイナミズムがより多面的に描かれる可能性が生まれた。ジェンダーの視点が採り入れられるようになったことも、重要な変化だった。ユネスコのアフリカ史 (UNESCO [1981: 93]) は、そのような社会史的な立場を採り入れたアフリカニストの歴史研究の集大成といえよう。また、マークスに率いられたイギリスのコモンウェルス研究所を拠点とする研究⁽¹⁴⁾や、「ヒストリー・ワークショップ」の運動⁽¹⁵⁾は、アパルトヘイト史観に強くいろうられていた南(部)アフリカ史の研究を大きく塗り替えた。とくに後者は、地域の民衆とともに歴史を掘り起こし、その成果を演劇などの形で彼らに伝えていく活動をつうじて、歴史学が民衆の生きる歴史に近づこうとする試みだった⁽¹⁶⁾。

「社会史」において強調された「民衆」の視点は、その後、1980年代のアメリカやヨーロッパで「ポストコロニアリズム」⁽¹⁷⁾の議論が盛んになることで、さらに掘り下げられていった。サイード (E. W. Said) のオリエンタリズム論 (サイード [1986]) にみられるような、近代ヨーロッパの思考の枠組みそのものへの批判、とりわけ、「観る者」(そしてそれをテキストにする者)と「観られる者」との関係に関する根源的な批判は、アフリカ史研究の存在意

義をも揺るがしかなかった。

本章でこれまで使ってきた「アフリカニスト」とは、専門的学問分野としてのアフリカ（史）研究者を指しており、その担い手には、時期により多寡の変化はあれ、アフリカ人自身も欧米人も含まれていた。成立の当初は植民地主義の歴史学との訣別という意味で批判精神に富んでいたアフリカニストの歴史研究も、それが職業的な「学問」として確立すればするほど、アフリカ社会に暮らす人々の現実からは乖離していく。アフリカ人の「アフリカニスト」であっても、自分の故郷の農民よりも欧米のアカデミズムに親近感をもつのがごく当たり前の状況が生まれた。上述の南アフリカのヒストリー・ワークショップの運動などは、アフリカ史研究のなかではむしろ例外的なものであった。アフリカニストもまた、サイドが批判したような意味での近代知のいわば共犯者として、アフリカ人を「他者」として観る立場に陥っていたのである。

こうした状況についてのコンゴの歴史家ンジエムの発言は示唆深い。ンジエムは、歴史学の立場から、「アフリカの歴史家」(African Historians)と「アフリカニストの歴史家」(Africanist Historians)との協力関係の可能性について提起している。すなわち、アフリカの歴史家には、アフリカ人として、現地の史料すなわちオーラル・トラディションをこれまで以上に積極的に集める任務がある。なぜならば、言語の面での優位にくわえ、オーラルな情報の背後にある文化的・社会的文脈をとらえることができるという点で、歴史史料としてのオーラル・トラディションの担い手はアフリカ人以外にいないからである。一方、植民地支配を行ったヨーロッパの国々に存在する文書史料にも、まだまだその存在と意味が発見され利用されていないものがたくさんあり、それに対してアフリカニストの歴史家は依然として重要な責任と役割をもっている。こうした両者の協力関係のうえでしかアフリカ史研究の発展はありえない、という (Nziem [1986: 24-25])。

ンジエムの主張は、文書史料とオーラル・トラディションとが二者択一的にとらえられ、支配された側の見方を独占しているかのように自任しがちだ

った初期のアフリカニストの歴史研究への反省であると同時に、当人はそのように明言しているわけではないが、「ポストコロニアリズム」の一刀両断的なテキスト論に対する再批判ともなっている。「ポストコロニアリズム」論によれば、植民地統治文書に代表されるようなヨーロッパ人の書いた「テキスト」は、もっぱら「支配する者」、「観る者」としてのヨーロッパ人の意識を反映したものであり、それ自体が「支配されるもの」、「観られる者」を作り出す働きをもっている。したがって、「テキスト」の批判をつうじて、そのような「支配する者」と「支配される者」、「観る者」と「観られる者」との関係解体しなくてはならない、ということになる。しかし、植民地時代のアフリカ史研究に関するかぎり、そのような「テキスト批判」に集中した「ポストコロニアル」論的な研究の多くは、むしろアフリカ社会の歴史にあまりに無頓着といわざるをえない⁽¹⁸⁾。そのような研究が植民地主義の歴史観への批判とはなりえないことは明らかだろう。求められているのはアフリカ史研究の現在の水準を踏まえた文書史料の批判的活用であり、それはオーラル・トラディションの積極的な導入と矛盾するものではない。

第3節 比較史の可能性

1. アフリカ史と比較史

先に引用したンジエムは、「アフリカニストの歴史学」(Africanist Historiography)に代わる「アフリカ人の歴史学」(African Historiography)を提唱している。彼によれば、アフリカ人のみたアフリカ史、アフリカ人のみたアメリカ史、アフリカ人のみた世界史……があり、また、ヨーロッパ人がみたアフリカ史がありアメリカ人のみた世界史があつてよい(Nziem [1986: 23])。従来のアフリカ史をアフリカの範囲を超えて他の地域との比較の俎上に載せ、そのことを通じて、アフリカ史を「世界史」へと繋げていこうとい

うのである。ここに、アフリカ史の独自性を「停滞」の観念から解放し、本来の意味の普遍性へと導く一つの道筋があるように思われる。

アフリカ人でないアフリカニストであるカーティンも同様に、「アフリカを出発点とするような世界像」の形成をつうじてアフリカ人の歴史学が世界のその他の地域の歴史学に与える影響について言及している。それによれば、アフリカの歴史家たちは、アフリカ以外の地域の歴史をみるときには、「国」単位の把握をしてこなかった。むしろ、「都市化」や「産業化」などといった問題設定に沿った歴史を描いてきた。たとえば、アフリカにとってのヨーロッパの歴史は、「国家」の歴史として並列すれば何の共通性もなく、植民地支配をめぐる支配と非支配の関係だけに収斂してしまうが、一定の軸を設定することで、それを比較可能な、意味ある存在としてとらえることができる。アフリカの歴史から出発した比較を行うことで、欧米やその他の地域の歴史学が従来もっていた枠組みをも突き破る可能性があるというのだ(Curtin [1981])。

そのような問題提起は、広い意味での「比較史」の提唱といえよう⁽¹⁹⁾。アフリカ史の理解を深めるための「比較」とは、単一の尺度により国家単位の歴史の前後関係を測ることではない⁽²⁰⁾。

2. 南アフリカ史とアメリカ合衆国史

ここでは、南アフリカとアメリカ合衆国の歴史の比較に取り組んできたアメリカの歴史家フレドリックソンの仕事をとりあげて、アフリカ史を「比較」のなかにおくことの意味を考えてみたい。

フレドリックソンによれば、「比較史」とは、社会史家たちが好んでとりあげたような特定の集団や特定の社会行動を概念化して比較するというような「マイクロゾミック」な比較でもなければ、特定の地域への深い関心なしに行われる国際比較論のような「マクロゾミック」な比較でもない。そうではなく、通常ひとまとまりの地理的領域には入らないような複数の社会を

体系的に比較することこそが比較史なのだ、と彼はいう。そこで目指されているのは、一方では、特定の社会の特徴を明らかにすることであり、他方では、一定の制度や過程を理論化してとらえることである。後者は、政治学・社会学・人類学・経済学などの関心に通ずるものではあるが、それらの研究は理論から出発しその正しさを経験的事実のなかで証明しようとする点で、歴史家の仕事とは明らかに異なる。そして、比較史は、比較の相手方で行われている研究の成果をも十分に考慮に入れなくてはならない、というのである (Fredrickson [1997: 23-24])。

アメリカ人であるフレドリクソンにとっての問題は、アメリカ史学の「伝統」が、自国の独自性を強調するあまりその歴史を美化してきたことであり⁽²¹⁾、彼の研究の眼目は、比較史研究をつうじてそのような偏狭さを克服することにあった。同様の関心に発するものとしては、人種関係の起源としての奴隷制を合衆国とラテンアメリカとの比較において研究する一連の研究が公民権運動の時期以来あったが、彼はその問題意識を引き継ぎながら、合衆国と南アフリカとの人種関係の比較に取り組んだ。それにより、「フロンティア」と植民者の人種意識の形成、奴隷解放・資本主義化と人種関係、人種主義とナショナリズム、黒人の抵抗運動の特質など、広汎なテーマがとりあげられ、「人種」観念の変遷や「人種」と「階級」との関係といった普遍的な問題に発展する論点が提示された。

人種関係の歴史を考えると、たしかにアメリカ合衆国と南アフリカとはきわめて有効な比較の対象であり、じっさい、フレドリクソンの仕事は、それまでもあった「フロンティア」に絞った比較よりもはるかに多面的な論点をとりあげ、比較史の方法のもつ可能性を多くの人に認識させた。しかし、そこには、合衆国と南アフリカとの歴史を総体として重ね合わせすぎる傾きもあった。とくに白人の人種意識に関する研究 (Fredrickson [1981]) では、その点が顕著だった。それは、二つの地域を単に「比較」の対象とし、両者の「関係」の側面を軽視しているということでもある。南アフリカにおけるアパルトヘイト体制は、現実には、アメリカ合衆国を中心とした資本主義体

制の世界支配との関係抜きには考えられないが、アミンやウォーラステインなどの強調したそのような視点が、彼の著作では欠落していた。それに対して、数年後に出された黒人解放運動の比較史研究 (Fredrickson [1995]) においては、パン・アフリカニズムやコミュニズムなどをつうじての両者の「関係」の側面がより重視されていることは、比較史の方法の深化として注目される。

「関係史」の側面を採り入れた比較の方法は、アメリカ合衆国、南アフリカにブラジルも加えて人種関係をいっそう緻密に比較した最近のマルクス (A. W. Marx) の研究 (Marx [1998]) にも引き継がれている。制度化された人種の分離・隔離を特徴とする合衆国・南アフリカの事例のほかに、制度化されない人種主義をもち、「人種」構成の面でも合衆国・南アフリカのいずれとも非常に異なるブラジルを加えることで、「比較」の奥行きが深められている。たとえば、奴隷制の特質が奴隷解放後の人種主義にどのような影響を与えているかを論じる場合、合衆国と南アフリカとのみでは、奴隷制そのものの広がりには違いがありすぎるため、必ずしも有効な比較とならない。ところが、奴隷制が合衆国と同じ程度に重要性をもったブラジルを含めた比較を行うことにより、奴隷制の特質 (たとえば、奴隷の扱い、解放の可能性など) の違いとともに奴隷解放の道筋や時期の違いなども検討の対象となり、それらを含めて、全面的な奴隷制社会 (合衆国、ブラジル) と限定的な奴隷制社会 (南アフリカ) との対比、というもう一つの比較の視点も導き出される⁽²²⁾。また逆に、南アフリカとの類推をつうじて、従来アメリカ合衆国との対比で「人種問題が(少)ない」と誤解されることの多かったブラジルの歴史について、その「人種主義」を制度や形式の面を超えて検討する道が開かれたのである。

このように、アフリカの諸社会の歴史を「比較」のなかに投げ入れることは、世界史のなかでのアフリカの位置を浮き彫りにするばかりでなく、アフリカが世界史の他の構成部分の意味を写し出す鏡として機能する、という二重の意味で、アフリカの世界史への参与につながる。

3. 比較史からふたたび世界史へ

これまでのところ、比較史研究は、アフリカ史研究者の側からは積極的に手がけられてはいない。たとえば、フレデリクソンの仕事に対応する包括的な歴史の比較論や、南アフリカ側からの研究はほとんど見当たらない⁽²³⁾。

最近になって、歴史学を含む人文・社会諸科学の分野で南アフリカと合衆国との比較は盛んになってきている⁽²⁴⁾。アパルトヘイト崩壊後の南アフリカが進むべき道を考えるうえで合衆国を念頭に浮かべるのは自然な発想であり、そのような傾向は今後も盛んになると考えられる。しかし、これまで南アフリカはアフリカ大陸のなかではむしろ特別視される存在だったのであり、南アフリカと合衆国との歴史の比較をもって、アフリカ全体についての「比較史」の隆盛を語ることはできない。南アフリカにおいて盛んになりつつある「比較史」への関心をアフリカ史全体へと広げるためには、南アフリカと他のアフリカ諸国との比較史を深め、「南アフリカ特殊論」をいかに克服していくかも課題となろう⁽²⁵⁾。

また、比較が盛んに行われている「人種関係」は、アフリカ史の一つの側面でしかないことも忘れてはならない。しかも、そこでは「植民者」側からの関心がまさっている場合もある。それに対し、たとえば、植民地化前のアフリカ諸社会について、どのような事象を抽出し、アフリカ社会相互あるいはアフリカ外の社会との比較を行うことが有益なのか、それについての検討は未開拓といってよい。アフリカに今日も残る狩猟・採集民をとりあげて、ヨーロッパの先史時代との比較を行うことや、そのような集団を「石器時代段階」という時代区分用語で形容することにいかなる意味があるのか。「比較」の契機をもった研究は、往々にして、アフリカ史のなかにみずからの真の関心の対象（たとえばヨーロッパ）の「過去」を見いだそうとするという動機によるのである。それは、アフリカ史研究者が主体となっていく「比較」とはおのずと異なるだろう。

総じて、「比較」は「国民史」の枠組みを重視する従来のアフリカニストの守備範囲外にあった。アフリカニストは、アフリカの歴史が自律的に発展する可能性をもっていたことを強調する立場から、そこに他の世界との比較をも超越した価値を認めようとする一種の歴史主義の傾向をもっていたといえる。とはいえ、アフリカニストの限界をめぐる議論のなかで、比較史的観点の重要性は指摘されており⁽²⁶⁾、また、膨大な史実のなかから取捨選択を行わざるをえない歴史教育の場面で、比較史の方法がすでに積極的に採り入れられている事実は見過ごすことができない⁽²⁷⁾。

「比較史」は、アフリカに歴史がないとする否定的な観点からのアフリカ特殊論や発展段階論的な比較論と対決するためばかりでなく、アフリカニストが陥りがちだった視野の狭さを克服し、アフリカ史を「世界史」の構成部分として積極的に位置づけるための攻勢的な方法として、今後のアフリカ史研究のなかでいっそう重視される必要がある。そのさい、アフリカ諸国が内実において「国民国家」を形成していないことが一つの有利な条件となりうるという逆説を指摘しておいてよいかもしれない。アフリカ社会の現実に即した「下からの」歴史を追求し、そこから比較の視座を引き出すことは、「社会史」とは別の意味で「国民史」に風穴を開け、「世界史」への新しい視座を獲得することにつながるだろう。

〔注〕

- (1) トレヴァー＝ローパーは、イギリス史家として「ジェントリー論争」や「十七世紀危機論争」の一方の論客として活躍したばかりでなく、ヒトラーの最後に関する著書を著わすなど、幅広い分野で論争的な発言を繰り返している現代の歴史家である。
- (2) 日本では、戦前にも官学アカデミズム以外のところでマルクス主義史学が大きな力を持ち、それが戦後の歴史学の基礎をつくったという特殊な事情がある。ヨーロッパにおいて、実証主義・歴史主義への批判理論として第二次世界大戦後にマルクス主義が注目を浴びるようになったのとは状況が異なっている。そうした状況を反映し、のちにみる「社会史」は、ヨーロッパではマルクス主義をも含んでいたが、日本では、むしろ圧倒的に影響力のあった

マルクス主義への批判という文脈で登場した。

- (3) 旧東ドイツのマルコフ (Walther Markov) を中心としたグループのアフリカ史研究は、アフリカからの研究者との協力関係もあり、今日なお有益な成果を残している。
- (4) 「社会史」的な研究方法は、この時期にはじめて生まれたわけではなく、すでに両大戦間期のフランスのブロック (M. Bloch) やフェーヴル (L. Febvre) の『アナール』(*Annales d'Histoire Economique et Sociale*) 誌の発刊がその端緒をなしたとされる。しかし、そのような問題意識が、「社会史」という名の、歴史学の新しい方法として意識的に提起されるようになったのは、1960年代以降であり、日本では1970年代頃から盛んになった。詳しくは、さしあたり、二宮 [1986]、パーク [1996]。
- (5) ここで日本におけるアフリカ史研究について一言しておきたい。日本では、歴史学の立場からのアフリカ史の実証的な研究はほとんど存在しなかった。植民地時代のヨーロッパと同様、アフリカの「歴史」に関する研究はもっぱら人類学の領域とされ、それは一般の歴史研究者の関心を惹かなかった。ところが、歴史学の分野で「人類学的歴史」としての「社会史」が脚光を浴びたその時期に、川田順三の『無文字社会の歴史』(川田 [1976]) をはじめとする一連の仕事が発表され、アフリカ史研究とは人類学的手法によって行われるべきものだとの理解が広まった。「アフリカにも歴史がある」ことを遅ればせながら日本での歴史家や一般の人々に認識させるうえで果たした川田の役割は計り知れないものがあるが、その一方で、アフリカ史は「歴史学」の手法では扱えないという理解が広がってしまったように見受けられる。それは、ヨーロッパの「社会史」が日本できわめて一面的に紹介されたことにも一因があるだろう。そうした状況が今日でも変わっていないことを示すのが、人類学者・民族学者によって書かれた「歴史書」、赤阪賢・大塚和夫・福井勝義『アフリカの民族と社会』(赤阪・大塚・福井 [1999]) である。それに対して、「歴史学」の成果として、吉國恒雄『グレート・ジンバブウェ』(吉國 [1999]) をあげておく。
- (6) 代表作として、Seeley [1883]。
- (7) 人類学・民族学・考古学などの「歴史研究」のアフリカ史研究への寄与については、Page [1981: 35ff]。
- (8) 1956年にナイジェリアのイバダン大学の歴史講座でディケ (K. O. Dike) が主任となり、以後、イバダンは初期のアフリカニスト歴史研究の一つの拠点となっていった。ほかに、ケニアのナイロビ大学やウガンダのマケレレ大学、タンザニアのダルエスサラーム大学が初期アフリカニスト史家を多く輩出した。
- (9) 詳しくは、Jewsiewicki and Newbury eds. [1986]。

- (10) 従属論やマルクス主義の立場を受け容れ世界経済の構造との関わりを念頭においた実証研究は、シェリフ (A. Sheriff) やそれに続く世代の、ダルエスサラーム大学に拠点をおく歴史家たち (「ダルエスサラーム学派」) によって行われた。ダルエスサラームは、初期アフリカニストの歴史研究においてもイバダン (「イバダン学派」) と並ぶ拠点であったが、この時期の研究は、それを一步先の段階へ進めたものといえよう。詳しくは、Austen [1993: 209-210]。
- (11) 最近の奴隷貿易研究の動向案内として、Miller and Smith [1997]。
- (12) 南アフリカ史研究の史学史として、Saunders [1988], Smith [1988]。
- (13) 筆者は、「民族」と「エスニック集団」とを使い分けたい立場から、ここでは「民族=エスニック集団」の表現を使う。この場合の「民族」は、当然、「国家」とは対応しない。
- (14) その成果は *Journal of Southern African Studies* 誌の形になっている。
- (15) 南アフリカのヒストリー・ワークショップの成果として、Brown et al. eds. [1991]。南アフリカのこの「下からの歴史」の運動は、イギリスにおける同名の運動の影響を受け、またそれとの直接の協力関係のもとに生まれた。
- (16) これらの新しい動向を踏まえた研究史整理として、Neale [1985]。また、アフリカ史研究者からのいっそうラディカルなアフリカニスト批判として、Temu and Swai [1981]。
- (17) ここでは、欧米の知識人の間で1980年代から盛んになっている「ポストコロニアル」の議論を念頭においているが、アフリカ史研究者たちの間では、同じ語が、「植民地独立後」という字義どおりの意味で使われるのが普通であることを注記しておきたい (たとえば Temu and Swai 著のタイトル)。そのことは、植民地時代と現在との距離の取り方に関する、両者の態度の差を反映しているように思われる。
- (18) たとえば、テキスト批判が現実のアフリカ社会の理解を著しく後退させている例として、Smith [1998]。
- (19) ヨーロッパの歴史学において「比較史」の方法を自覚的に追求したのは、『アナール』誌の創始者の一人であり「社会史」の土台を築いたM・ブロックだった (注4参照)。歴史を全体史として理解しようとするブロックが「比較史」の方法を重視したことは示唆深い。当時の歴史学で支配的だった歴史主義においては、歴史は一時的なものとされていたから、異なる社会の比較を行うことは歴史に対する冒瀆ですらあった。そのような風潮のなかで、ブロックはあえて「比較」という方法をとることにより、それぞれの社会の歴史を多面的にとらえる道筋を示そうとしたのだった。ただし、ブロックが念頭においたのはあくまでもヨーロッパの範囲での「比較」であったことは、すでにみたような当時のヨーロッパの知的状況において、当然のことだった。

マルク・ブロック（高橋清徳訳）『比較史の方法』創文社，1978年（原著は1926年）。

- (20) アジアを含む諸国家の歴史の研究をつうじて社会発展の一般法則を抽出しようとしたマルクスの理論は、「比較」をつうじてアフリカを他の地域と同等の世界史の構成部分としてとらえる可能性を秘めていた。しかし、「国家」が分析単位とされたことで、「比較」は容易に「序列」へと転じることになる。
- (21) 世紀転換期のアメリカの歴史家ターナー（F. J. Turner）は、ヨーロッパ史とは区別されたアメリカ史を目指し、アメリカ史の特質を「フロンティア」にみ、そこに自由と自立を基本とする「アメリカ的生活様式」の起源があると主張した。この「フロンティア学説」は、「白人のアメリカ」を自由の旗手とするイデオロギーを支える歴史観として、長らく影響力をもった。
- (22) ただし、南アフリカの歴史における奴隷制の位置を小さく評価してよいわけではなく、ここではあくまでもブラジルや合衆国との違いを問題にしているだけである。むしろ、最近の南アフリカ史の研究では、のちの人種主義体制との関係で、奴隷制の意味を従来よりも重視する傾向にある。そのような動向を示す研究として、Worden [1985], Shell [1994]。
- (23) 限定された領域での比較史としては、たとえば、Beinart and Coats [1995]。また、南アフリカの研究者からの「比較」への関心を示すものとして、社会学者による研究（Schutte [1995]）がある。ただし、その主要な関心は、当然「現在」にあり、歴史的な内容を含みつつも歴史学の方法とは区別されるべきものである。
- (24) たとえば最近、ディシプリンを限定しない比較の場として、*The Journal of South African and American Comparative Studies*が創刊されている（www.safundi.com）。ただし、その比較の範囲は、アメリカ合衆国と南アフリカ共和国とに明示的に限定されている。
- (25) これも歴史学者の仕事ではないが、多分に歴史的関心に裏づけられ、意識して南アフリカの「特殊性」を否定し、アパルトヘイトを植民地主義の一形態とすることで、アフリカ史における植民地主義の問題を鋭く扱った研究として、Mamdani [1996]。
- (26) Jewsiewicki [1993: 222]。
- (27) たとえば、Bam and Visser [1996]。今後、アフリカ諸国で、職業化したアフリカニスト的歴史研究と歴史教育との関わり方が問題となるであろうことは、カーティンも指摘している（Curtin [1981: 67-68]）。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- 赤阪賢・大塚和夫・福井勝義 [1999] 『アフリカの民族と社会』（「世界の歴史」24）中央公論社。
- アミン, S. (野口祐・原田金一郎訳) [1979] 『周辺資本主義構成体論』 柘植書房。
- (北沢正雄訳) [1981] 『帝国主義と不均等発展』 第三書館。
- ウォーラーステイン, I. (川北稔訳) [1981a] 『近代世界システム I, II』 岩波書店。
- (川北稔訳) [1981b] 『史的システムとしての資本主義』 岩波書店。
- 川田順三 [1976] 『無文字社会の歴史』 岩波書店。
- サイード, エドワード・W. (今沢紀子訳) [1986] 『オリエンタリズム』 平凡社。
- 二宮宏之 [1986] 『全体を見る眼と歴史家たち』 木鐸社。
- バーク, ピーター (谷川稔訳) [1996] 『ニュー・ヒストリーの現在』 人文書院。
- フランク, A. G. (大崎正治ほか訳) [1979] 『世界資本主義と低開発』 柘植書房。
- ブロック, マルク (高橋清徳訳) [1978] 『比較史の方法』 創文社 (原著は1926年)。
- ヘーゲル (長谷川宏訳) [1994] 『歴史哲学講義 (上)』 岩波書店 (原著は1837年)。
- メイヤスー (川田順三・原口武彦訳) [1977] 『家族共同体の理論 経済人類学の課題』 筑摩書房。
- 吉國恒雄 [1999] 『グレート・ジンバブウェー東南アフリカの歴史世界一』 講談社。
- ランケ (鈴木成高・相原信作訳) [1941] 『世界史概観 近世史の諸時代』 岩波書店 (原著は1854年)。

〈外国語文献〉

- Austen, Ralph A. [1993] “‘Africanist’ Historiography and Its Crisis: Can There Be an Autonomous African History?” in Toyin Falola ed., *African Historiography: Essays in Honour of Jacob Ade Ajayi*, London: Longman, pp.203-217.
- Bam, June and Pippa Visser [1996] *A New History for A New South Africa*, Cape Town: Kagiso Publishers.
- Beinart, William and Peter Coats [1995] *Environments and History: The Taming of Nature in the USA and South Africa*, London: Routledge.
- Brown, Joshua et al. eds. [1991] *History from South Africa: Alternative Visions and Practices*, Philadelphia: Temple University Press.
- Coquery-Vidrovich, Catherine [1985] “The Political Economy of the African Modes of Production,” in P. Gutkind and I. Wallerstien eds., *The Political Economy of Contemporary Africa*, London: Sage Publishers.

- Curtin, Philip D. [1981] "Recent Trends in African Historiography and Their Contribution to History in General," in UNESCO, *General History of Africa*, I, Paris: Unesco, pp. 54-71.
- Fage, J. D. [1981] "The Development of African Historiography," in UNESCO, *General History of Africa*, I, Paris: Unesco, pp. 25-42.
- Fredrickson, George M. [1981] *White Supremacy: A Comparative Study in American & South African History*, New York and Oxford: Oxford University Press.
- [1995] *Black Liberation: A Comparative History of Black Ideologies in the United States and South Africa*, New York and Oxford: Oxford University Press.
- [1997] *The Comparative Imagination: On the History of Racism, Nationalism, and Social Movements*, Berkley, Los Angeles and London: University of California Press.
- Hopkins, A.G. [1973] *An Economic History of West Africa*, 2vols., New York: Columbia University Press.
- Jewsiewicki, Bogumil [1993] "African Studies in the 1980s: Epistemology and New Approaches," in Falola ed., *African Historiography*, pp.218-227.
- Jewsiewicki, Bogumil and David Newbury eds. [1986] *African Historiographies What History for which Africa?* London: Sage Publications.
- Mamdani, Mahmood [1996] *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*, London: James Currey.
- Marx, Anthony W. [1998] *Making Race and Nation: A Comparison of South Africa, The United States, and Brazil*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Miller, Randall M. and John David Smith [1997] *Dictionary of Afro-American Slavery*, Westport, Conn.: Praeger.
- Neale, Carline [1985] *Writing "Independent" History? African Historiography 1960-1980*, Westport, Conn.: Greenwood Press.
- Nziem, Ndayael E. [1986] "African Historians and Africanist Historians," in Jewsiewicki and Newbury eds., *African Historiographies*,
- Saunders, Christopher [1988] *The Making of the South African Past: Major Historians on Race and Class*, Cape Town and Johannesburg: David Philip.
- Seeley, John Robert [1883] *Expansion of England*, London: Macmillan.
- Schutte, Gerhard [1995] *What Racists Believe: Race Relations in South Africa and the United States*, London: Sage Publishers.

- Shell, Robert C.-H. [1994] *Children of Bondage: A Social History of the Slave Society at the Cape of Good Hope, 1652-1838*, Honover: Wesleyan University Press.
- Smith, Helmut Walser [1998] "The Talk of Genocide, the Rhetoric of Miscegenation: Notes on Debates in the German Reichstag Concerning Southwest Africa, 1904-14," in Sara Friedrichsmeyer, Sara Lennox and Susanne Zantop eds., *The Imperialist Imagination: German Colonialism and Its Legacy*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp.107-123.
- Smith, Ken [1988] *Changing Past: The Trends in South African Historical Writing*, Athens: Ohio University Press.
- Temu, Arnold and Bonaventure Swai [1981] *Historians and Africanist History: A Critique. Post-Colonial Historiography Examined*, London: Zed Press.
- Trevor-Roper, Hugh [1966] *The Rise of Christian Europe*, 2nd ed., London: Thames and Hudson.
- UNESCO [1981] *General History of Africa, I: Methodology and African Prehistory*.
- Vansina, Jan [1965] *Oral Tradition as History*, Madison: University of Wisconsin Press. (Original: *De la tradition orale: Essai de méthode hitorique*, Tervuren, Musée Royal de l'Afrique Centrale, 1961)
- Worden, Nigel [1985] *Slavery in Dutch South Africa*, Cambridge: Cambridge University Press.